

論文

## 歴史的時間の固有性について

椿 井 真 也\*

### 1. 序——問題の所在

「歴史的なものは時間的なものである。・・・(中略)・・・歴史的なものは本来『時間から理解されることを欲する事物』である<sup>1</sup>」。こう述べたのは、その主著の一つに挙げられる『歴史哲学』で知られる三木清である<sup>2</sup>。三木の言葉通り、歴史の問題は時間の問題と密接不可分な関係にある。ここでは、そういう概ねの認識の一致が見られることを予め確認しておくことから始めたい。そうすると、次のような疑問が直ちに提起されよう。歴史と時間、あるいは「歴史的なもの」と「時間的なもの」が概念として密接不可分な関係に立つとしても、それらは全く同じ意味を有するものではないはずだから(全く同意義であるのなら、別異の概念として存立する必要がない)、何が両者の差異を穿つのであろうか、と。本稿の目的は、この区別が「歴史」という言葉によって明示的であるか默示的であるかを問わず思念されているはずの固有の時間性、謂わば「歴史的時間」とでもいうべき固有の時間性によってなされる次第を論定することである。

カントは、現象の先験的な形式としての謂わば「可能性の条件」である経験理解のカテゴリーとしての「時間」の概念を提起したわけだが、中でも歴史の因果連鎖の必然性と人間的自由の「交差点」としての「行為」の特質に着目したことはよく知られている。すなわち単刀直入に言って、人間は自らをして「行為」の原因たらしめる、という主張である。カントは、その『純粹理性批判』の「感性論」において、時間は外的・内的両世界を秩序づける能力を持つという意味で「経験的實在性」を持つと論じるとともに、その「弁証論」において、時間は自由な行為を秩序づけることができないという意味で「超越論的観念性」を持つとも指摘した。つまり、カントは時間の持つ二重の性格を抽出したとも言えよう。また、哲学的時間論において頻繁に取り上げられる「時間の非實在性(The Unreality of Time)」を主張するジョン・エリス・マクタガートによると、時間の表現に関して我々は大きく二つの表現に整理される。一つは「A系列」の時間であり、もう一つが「B系列」の時間である。後に詳説することになるが、前者は「現在」とされる特殊な時制の特権性を前提に、それが流動していく描像のもとに捉えられる時間表現であるのに対して、後者は「より前」「より後」という出来事の継起の順序関係を示す時間表現としてとりあえず略述しよう概念である。マクタガート自身は、時間にとって本質的なのは前者の方であるが、しかし同時に、前者の概念は自己矛盾的であるからして時間が実在することはないという論筋での立論を展開するわけであるが、本稿ではこの立論を「時間の非實在性」の論証としてではなく、むしろ彼の抽出した時間表現の二重の性格が、「歴史的時間」を考える上で格好の素材を提供してくれているものとみなすところに特徴がある<sup>3</sup>

現在の日本における歴史哲学的営為は、後に示すように、いわゆる「戦前」期より盛んに為されているとは言い難いが、その数少ない試みの中で際立った特徴を持つ考察として野家啓一による歴史哲学的考察が例に挙げられよう。野家は、「歴史的時間」そのものを直に抽出することまではしないが、直線的描像のもとに捉えられた「流れ」として表象されがちな時間ではなく、「堆積」という比喩的表現のもとに「地層的」理解の図式を提示する(「時は流れない、それは積み重なる」(サントリー・テーゼ<sup>4</sup>))。この野家の思考や、現象学に思考の基軸を置きつつもミシェル・フーコーの系譜学の方法や複雑系科学などの知識を踏まえた歴史の哲学を提示する貫成人の思想的営為も、本稿の言う「歴史的時間」の固有性に絡む問題を異なる仕方で提起しているとも言える<sup>5</sup>。さらに体系的な歴史哲学の

キーワード：歴史、時間、A系列、B系列

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年度3年次転入学 生命領域

著作神川正彦『歴史における言葉と論理——歴史哲学基礎論』全2巻は、「歴史」の概念規定の問題性から論を起こしつつ、「歴史」が綴られるところの言葉の動態性や叙述のナラティブの在り方などを詳細に分析し、最終的には「歴史」の認識可能性の条件にまで射程を延ばした立論になっている。しかしながら、それらは「歴史的時間」の固有性そのものに対して直接に対してはしていない。

そうした中で、我が国の所謂「京都学派」に見られた思想的営為は、その切迫する時代状況であっただけに、「歴史」の問題にその思考が突き動かされてきたとも言える。時局との緊張関係においてその思考が果たしてきた役割には功罪両面が存することが否めないが、とかく「歴史」について、中でもその「歴史的時間」の固有性ともいべき独特の構造を直接的に主題化してきた営為を無視することはできない。そこで、この問題について特に深く思考してきた田辺元や三木清における「歴史的時間」の固有性をめぐる立論を取り上げながら、その固有性の核となるべきものをマクタガートの時間と対質させつつ抽出していくことにしたい。「歴史的時間」の固有性の問題は、時間の本質を問う形而上学的な問題というよりはむしろ、具体的な世界における実践の場面における対世界、対人間との関係から構成される認識論的問題であることを示したい。

## 2. 自然的時間・物理学的時間概念・歴史的時間

三木清は、歴史における時間の問題を考察するにあたり、歴史的時間を自然的時間や自然科学的時間との区別において捉えるべきことを提起する。

ここでいう自然的時間とは、我々の日常において漠然と思念されている時間描像のことを指す。もっとも、我々の日常における時間描像そのものは、汎時代的・汎文化的一般性を持つものとは言い難い。しかし、概ね次のような大まかな特質を持つものとして考えておいてよいだろう。すなわち、聖アウグスティヌスが示した一方の見方であるところの、「未来」を「不定なもの」として、「現在」を「所与のもの」として、「過去」を「確定しているもの」として表象する見方である<sup>6</sup>。

「未来」と「過去」は「現在」から分離して生じるとはいえ、それは「未来」と「過去」が「現在」に対して「他者」になったわけではなく、「未来」と「過去」は「現在であり」かつ「現在ではない」という二重構造を有している。「未来」は選択的行為により「現在」から分離される。「現在」の行為選択により「未来」に実現せられるべき状況が異なるという認識から、目的すなわち『「未来」に実現することが望ましい状況』を生み出す行為が「現在」において選択される。「未来」は、目的意識および因果関係の認識と同時に発生するともいえるだろう。

因果的連鎖は「原因」が「結果」を生ぜしめるものであるが、意識された行為においては「目的」が「結果」として生じるような「原因」を作るのだから、「結果」が「原因」を生ぜしめていると理解することもできるだろう。意識された行為において、「目的」すなわち「結果」が「原因」となる行為に先行するようと思われる場面も見られ、このような一方と他方との双方向的な運動が形成されることから、異方的直線とは別の時間表象が、特に日常生活における自然の擬周期的現象の観察経験と合わさって定立されてきた歴史もある<sup>7</sup>。他方、種々の力を周期的関数に分解したとみて充分多種の周期的なものを集積すれば元の力とほぼ同一のものになるから、このような力から生じる運動は周期的であるとも考えることもでき、その意味で、それゆえに物理学的時間に定位して再考してみた場合でも、ある程度の説得力を持つ時間表象と言えなくもない<sup>8</sup>。

しかしながら、この円環的時間表象は、聖アウグスティヌスが他方で示しているように、「歴史的時間」とは言い難い。「歴史的時間」にとって必要条件である歴史の出来事の現在性・一回性・不可逆性が含まれていないからである。

この自然的時間と区別されるものとして、三木が「自然科学的時間」として表現するところの物理学的時間についても同様のことが指摘される。とはいえ、物理学の時間概念は質的差異を無視した単なる数量化可能な対象として時間を捉え、時間をパラメータ $t$ によって表現しそれに自足しているなどとする巷間溢れる非難は、物理学的时间概念に対する批判として適切ではない。確かに、物理的な系の特性に関する命題は、状態空間 $S$ の部分集合全体上のプール代数と同定可能であり、プール論理で記述されるとする論理的思考は、相対論をも含む古典物理学の数学的構造に実現されているという前提が採られている。それゆえ、古典論における系の時間発展を記述する場合、任意の時刻における状態指定は当該時刻における系に関係するすべての物理量の値を決定するに足りる程度になさ

れる。そして、物理量とその特性概念を系の状態空間  $S$  の概念に充填させ、別の任意の時刻  $t_2$  の状態は「より前」の任意の時刻  $t_1$  の状態により一意的に決定させることが可能になる。かくして「因果関係」の原理は、物理学において決定論的過程として考察されてきたのである。事実、多くの系では、時刻  $t_1$  の状態  $s$  は、後の時刻  $t_2 > t_1$  の状態のみならず、より前の任意の時刻  $t_0 < t_1$  の状態つまりは  $s$  に時間発展する時間  $t_1 - t_0$  の間の状態をも決定すると考えられているのである<sup>9</sup>。

しかしながら、エドムント・フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』のガリレイ批判を典型とするように、しばしば「科学主義」として指弾されがちなガリレオ・ガリレイを例にとっても、事態はそう単純なものではないことは明白である。ガリレイの考察に因んで言うならば、振子の振動時間を測っているときも、脈打つ時間を測っているときも、我々は「時間そのもの」を測っているわけではない。我々は、振動や脈拍やそのほか様々な物理的変量を計測し、後にある変量と別の変量を比較しているにすぎない。要するに、我々が計測しているのは、ある変量と別の変量との関数にほかならない。もちろん便宜上、時間  $t$  を想定することは有益なるがゆえに使用されている。しかし注意すべきは、我々はこの変数を直接計算することはできない、ということなのである。物理的な変量に関する方程式は、この観測できない  $t$  を基に記述されている。これら方程式は、 $t$  の値の変化にともない、事物がどのように変化するかを示してくれる。とはいえ、変数としての時間は仮定の存在でしかない。事実、量子論の文脈においては、実数で表示される時間パラメータを前提にすると、経路積分の測度は定義できなくなる。重要なことは、物理学の諸理論がどのような時間描像をもたしているかということである。だから、便宜上使用されている時間  $t$  は、例えば量子重力理論において「宇宙のはじまり」ないしは「時間のはじまり」と言われる際の「時間」とは異なっていると言わなければならない。むしろ、量子重力理論の有力な学説の一つは、もはや世界を包含する空間も事象の発生を順序づける時間すら存在しないという描像を与えてもいる。

しかしながら、物理学的時間概念が、単純な実数パラメータ表示  $t$  による数量化可能な量として考えられているわけではないとしても、「歴史的時間」との対比で考えるならば、決定的な要素が欠如していると言わなければならない。それは、「現在性」の欠如である。

田辺元は『歴史的現実』において、「歴史的現実」とは何かを知るにあたっては、歴史を歴史たらしめている「時の構造」を抽出しなければならないとする。現実とは「現在」において成り立っているものであるとし、この意味で「過去」も「未来」も直ちに現実とはいえない。現実とはこの「現在」に我々が直接に接しているものであって、もし単に自然の現象のように「過去」から「現在」、「現在」から「未来」にわたり同じ法則に支配せられているものとすれば、「過去」・「現在」・「未来」という時の様態を異なる時制で区別しても、そうした区別は特別な意味を持つものではない、というのである。

「歴史とは生成するものが同時に我々の自由な働きに属する、生成は行為を含みそれを媒介とする。生成即行為であると云う所に成り立つものである。併しそうだからといって、我々は歴史的現実を勝手に作為する事は出来ない。我々は過去の必然性によって決定されている事を通してでなければ、自由に可能性を未来に実践する事はできない。決して単に無媒介に新に未来を決定して行くという事はできない<sup>10</sup>」。

田辺によると、物理学者は「時」をパラメータ  $t$  で表し座標軸上の点を原点としてどうとててもよいが、我々が現実というときは、現実のもつ「現在」はどこにとってもよいというものではなく、むしろ動けないように限定されているところである。しかし同時に、動けないように制約されているその裏には、我々が希望と要求に従い自由に「未来」を作って行く事が出来るという事を予想しているとも言う。我々が歴史的現実について関心を持つのは、「過去」が我々の「未来」の可能性を限定しているからであり、他方でそもそも関心を持てるということは、「動ける」からである。その上で田辺は、歴史が「現在」に働くということは、「現在」が「未来」に向かって自由な可能性を持っていることと関係づけるわけである。その意味で、歴史とは過去が現在に向かって生成して来たものと捉える描像は、田辺からすれば不十分な描像であると言わねばならなかった。要するに、そうした直線的に表象された描像は、質点力学がその原点をどこにおいても構わないのであるから特権的な「現在」は記述できないというのと同様、構造的には何ら変わる場所がないというのである。「現在」というものは「未来」の可能性を予想しなければ成り立た

ない。「過去」が我々を動くことのできぬよう束縛しても、それが歴史的現実と考えられる時、それでもなお働き得る、新たに作り得るという意味を同時に含んでいる必要がある、この点が歴史と自然を決定的に分かつ。田辺は、このような限定されつつ限定の箍を破ろうとする相矛盾する契機を含む運動に「現在」の特質を見出していると言えるだろう。歴史にとってこの「現在」のもつ特質性が欠くべからざる要素と田辺が考えた理由はそこにある。この点、自然は運動変化するだけである。生物にしても、何等かの見地から価値が増大し、その構造がより複雑な機能を持つ様に分化し発展するというだけでは歴史を持つとは言えない。

「歴史は、過去から押す力と未来から決定する力との相反する二つの力が結び合い、交互媒介する円環に成立する・・・(中略)・・・所が交互関係に於ては一方は自己の結果であるところの他方によって決定されているから、それは最早因果ではない。自分が自分を決定するという自発性がそこにはある<sup>11)</sup>」。

翻って、ニュートン力学においては質点が基準系として設定されていた。量子力学によれば、宇宙全体が一つの系である。そうすると、波動関数の収縮は古典外部系を別に設定しない限り入る余地がない。また、四次元時空多様体を実在のように考える相対論の解釈では「現在」の概念を導入することは不可能である。相対論から考えられる時間描像において、「現在」は四次元時空の時間軸の任意の一点ではない。そうすると世界を四次元時空多様体として捉える相対論においては、このような「現在」における変化を記述することはできないはずである。つまり、特殊相対性理論によれば、「宇宙の現在の状態」つまりこの瞬間に存在しているスナップショットによってあらわにされるものが存在しないことを示した。「同時性の相対性」は、もし二つの基準系が互いに相対的に運動しているならば、ある慣性系に対して「現在」とみなされるものが、もう一つの慣性系で「現在」とみなされるものとは異なっていることを意味する<sup>12)</sup>。

### 3. 「歴史的時間」と A 系列、B 系列の時間

このような「現在性」の欠如は、「歴史的時間」を考える上で深刻である。終局的にはマクタガートやジュリアン・バーバーのような最も過激な時間の非実在論者であったクルト・ゲーデルも、ここでいう「現在性」の欠如について疑問を供していた<sup>13)</sup>。「過ぎ去る」とか「流れる」という形容に現れる日常的な時間感覚とアインシュタインの相対性理論から帰結する時間描像との間には矛盾があることを指摘するのである。もちろん、このことについてゲーデルがわざわざ確認するまでもなく、多少、特殊相対性理論及び一般相対性理論に触れた者ならば当然に提起されるだろう。問題は、「歴史的時間」を考察する上でこのゲーデルの疑問が持つ深い含意に関わる<sup>14)</sup>。

そこで、ゲーデルが問題とした相対性理論における時間と「現在」をめぐる時間感覚との整合的理解について、彼がどのような主張をしているのか簡単に確認しておく必要がある。ところでマクタガートによると、通常において時間上の特定の出来事を記述する方法は二種類存在するという。一つは、「現在」を基準として「過去」、「未来」に出来事を位置づける方法であり、このような時間表現を「A 系列」とする。もう一方で、「B 系列」の時間として、「より前」や「より後」という固定した関係を用いて日付と時間を特徴づけることができるとする。この「B 系列」の時間とは、本質的に流動的な性格を持つ「A 系列」とは対照的に幾何学的に定義された性格を持つ。A 系列の時間は、本質的には流動的であるがゆえに「動いている現在」すなわち「現在」の瞬間を含み持ちつつ常に流転している。「時間」として両者のうちより本質的なのは A 系列であるとマクタガートは考えたわけだが、A 系列が直観的に最も基本的な時間の側面を表現しているとはいえ、それは、いずれも数学の形式的言語では捉えられにくい付随物をともなっている。それは、「現在」が他のすべてにまさる「特権」を持っているということである。この考え方によれば、時間はある「方向」に向かって「通り過ぎ」、あるいは「経過する」。「未来」だったものが「現在」になり、やがて「過去」になる。空間でもなければ空間類似に表象可能な B 系列の時間のどちらとも隔たりがある。A 系列の時間における位置は、そもそも存在論的に中立ではない。時間は概してこの A 系列と B 系列の両者によって特徴づけられるが、日常生活で経験する時間を形式的な時間、例えば物理学的時間と同一視すると問題が生じる。先だって確認したように、我々が  $t$  と呼称する当のもの、つまり相対論的時空の時間成分に関して言うならば、B

系列の時間を表現すると首尾一貫した解釈ができるように思われる。ところが、A系列となると話は別である。なぜならば、アインシュタインが述べているように、特殊相対性理論では、「現在」は空間的に広がりのある世界では意味を持たないので、 $t$ はA系列を表すことはできないように思われるからである。そこにはただ一つの世界的な「現在」があり、その「流れ」は空間的ではなく時間的な実在を特徴づける存在するものの変化を構成する。相対論的時空の特徴の一つは、空間と時間がもはや独立した存在ではなく、空間でも時間でもない「時空」という単一の新しい種類の存在の二つの成分であることである。A系列を空間に似せることはできないという事実を、ある意味隠蔽していたのは、特殊相対性理論では $t$ が形式的には三つの空間次元から区別されているということである。時空の「間隔」すなわち枠組み不変のそれゆえ運動状態を問わずすべての観測者が同意するような二つの時空の出来事の間の一意的な関係の定義では、時間変数 $t$ は前に負号をつけて三つの空間変数とは区別される。しかし、こうしたことは、特殊相対性理論における時間は空間次元とは異なることを意味すると解しても、それは特殊相対性理論の「時空」間の「距離」の導出は、ユークリッド幾何学において三平方の定理によって三角形の斜辺の長さを導出することができるように求められるわけではないということ、すなわちユークリッド幾何学ならぬ謂わば「ローレンツ幾何学」とでもいうべき幾何学を前提にしているということの意味するに過ぎず、むしろ時間が空間とは質的に異なった種類の存在ではないこと、つまりは何か「流れる」ものではないことをも示している。

ゲーデルが取り上げる哲学者とは、パルメニデス、プラトン、ライブニッツ、カントなどの時間の「流れ」に対する我々の主観的な経験が客観的な相関性を持つか否かを問題にしていた哲学者であった。このような哲学者にとって時間は常に懐疑的であったわけである。ゲーデルは「直観的時間」を「相対性理論以前に人々が時間として理解していたもの」とし、この時間は「自然のすべてのものごとを完全に直線状に順序づける、一次元の多様体である」としている。先述の通り、特殊相対性理論によると、A系列の「現在」は排除されている。特殊相対性理論が「特殊」であるのは、相互に速度が一定である慣性基準系だけに限定しているからであった。対して一般相対性理論は重力を加味した包括的な理論であったことも繰り返すまでもあるまい。特殊相対性理論ではいかなる系も特権的な系ではありえない。しかし、ゲーデルに言わせると一般相対性理論では、ある系すなわち宇宙の「物質の平均運動にしたがう」ものが特別扱われる。この「宇宙時間」は、ある意味「時間」が再現されているとも言える<sup>15</sup>。ところが反転してゲーデルは、この再現した「時間」を消去するのである。一般相対性理論の方程式では二つの解のうちどちらか一つを選ぶことが可能となるが、いずれも可能な宇宙、相対性理論的に可能な世界を決定する。ゲーデルは重力場方程式の解を発見し、そこから帰結する閉時曲線の特徴とする「ゲーデル宇宙」を提起した。この閉時曲線に沿って十分な速度で旅をすれば過去と呼ばれる場に到達できることを示す。つまりは「タイムトラベル」である。ゲーデルにとって「過ぎ去る」ことのない「時間」は文字通り時間ではなかった。この点で、A系列をより本質的と捉えるマクタガートとゲーデルは意見の一致を見る<sup>16</sup>。

翻って三木清によると、「歴史的時間」を構造づける事実的時間としての「行為の時間」は、行為における二重の超越を認めるところにその特徴がある。人間はすべからく「歴史人」すなわち歴史を「作りつつ」ある人間であり、行為の立場は行為の対象として意識を超越する「存在」を認めねばならないとともに、背後において意識を超越する主体たる事実を認めることなしには真に行為の立場であることができないということである。事実的時間とは「行為の時間」であっても単なる主観的時間意識としての時間とは異なる意味が与えられている。そして歴史的時間は、「存在」としての歴史の時間でもあって、「より前」「より後」の関係が「刻まれる」。そして三木は、「歴史的時間」が有する三つの根本徴表を次のように抽出するのである。

「第一に、歴史的時間が存在としての歴史の時間であることと根本的に関係する。即ちそれは『今』として特性づけられる存在の時間の本質に属している。未来も『次の今』であり、『今』は真の現在でなく『既に』の意味を含んでいる。・・・(中略)・・・真の現在は今ではなく瞬間である<sup>17</sup>」。

このように三木は、「現在」の流動性とその特権性を「歴史的時間」の前提として必要欠くべからざるものとして提示している。とはいうものの同時に、「現在」の流動性及び特権性だけからは回顧的時間は成立しえても「歴史的」な時間性とまでは言い難い旨を次の第二の特質として抽出している。

「第二に、歴史的時間は次に存在としての歴史の時間として事実的時間に構造付けられている。事実的時間に於ては時は一瞬一瞬に消え、一瞬一瞬に生まれるのである<sup>18)</sup>」。

「歴史的時間」には、連続性ととも非連続性としての瞬間が二重に覆いかぶせられている必要がある旨を三木は主張する。この主張は何ら特異なものではなく、先の田辺元にもみられた考察の一つである。事実は存在に対して絶えずその連続性を破ろうとすると同時に、逆に存在は破られた連続性を絶えず綴り合わそうとするという一見背反する運動、そうした運動によって構造づけられたものが「歴史的時間」であるというのである。歴史的時間は事実的時間によって構造付けられたものとして現実的に歴史的である。

「第三に、存在の時間は過去から未来へと流れる。いまこれが事実的時間によって構造付けられるとき、それは逆に未来から過去へという方向をとらせられると見える。・・・(中略)・・・本来の目的論はこのような一種の見方でなく、存在とは区別される事実を認めるところに成立する。目的論的關係は、因果的關係の如く存在と存在との間に於てでなく、主体的事実と客体的存在との間に於てのみ成立することが出来る<sup>19)</sup>」。

三木は、「歴史的時間」の特質として挙げられる時間の「方向性」は、「過去」から「未来」への因果論的見方に相応する方向性と、「未来」から「過去」への目的論的見方に相応する方向性を取り上げるわけだが、注目すべきは三木が「歴史」を存在の秩序として考えているわけではなく、「主体」と「客体」との間においてのみ成立する事態であるとしている点である。そして三木は、前後の継起的順序の動かしがたい「日付」を「刻む」時間の性格と、自然環境的時間に一定程度制約される概念である「世代」のもつ重要性を指摘する。先のマクタガートの立論に照合して考えるならば、「より前」「より後」の固定的順序と関係するB系列の時間の重視である。とはいえ、三木がマクタガートのいうA系列をB系列に比して本質的なものとみなさないということの意味するわけではない。田辺元と同様、三木も歴史における行為の「つくる」という役割を重視する<sup>20)</sup>。ちょうど先に触れ通り、田辺が歴史的時間の「時の構造」を取り出す際に、物理学的時間表象の一つとして持ち出されるパラメータ  $t$  に対する考えを供していた場面を想起しよう。当時の物理学に関して相対論のみならず量子論の動向にまで配視していた田辺が、巷間聞かれる単なる数量化可能性としての時間表示の単純さを否定しているわけではないことは明白であろう。そうではなく、田辺が指摘していた事実とは、時間を思考する際に本質的な要素であるところのマクタガートの言うA系列の時間が、物理学の理論とりわけ相対論が示す世界描像としての四次元時空多様体においては占める場所を持たないという点を指摘していると理解することができる。その意味では、ゲーデルの疑問と田辺の指摘も驚くほど類似している。また、「歴史的時間」は行為の時間である事実的時間に構造付けられねばならないとする三木清もまた、当然にここにいうA系列の時間を本質的であると考えていたということである。問題は、時間の本質を問う時間論から別異の「歴史的時間」論を展開する場合、A系列を本質としつつも、それ自体が内部に自己矛盾を抱懐するがゆえに成り立たず、したがって時間は非実在的であると結論づけるマクタガートやゲーデルとは異なり（彼らは時間の本質を思考しても、歴史について思考したわけではない）、A系列の時間とB系列の時間という相異なる時間表象が接合される場面においてこそ「歴史的時間」の固有性が現れることを示していたのではないかと考えられるのである。

#### 4. 結論

マクタガートが証明しようとしたことは、「時間の非実在性」であった<sup>21)</sup>。とはいえ、マクタガートは不在を証明しようとする当のものを前提にした立論を行っている。もちろん、これは論点先取にはなっていない。時間の「実在」までコミットした前提ではなく、あくまで時間現象の前提をおいただけのことであるからだ。しかし、「歴史的時間」の固有性の問題は、存在論的な問題ではなく、対世界あるいは対人間との相互連関において構成される認識論的問題であって、このマクタガートの立論の仕方に含まれる別の意味を読み取ろうとすると、この問題を考えるにあたって示唆に富む重要な側面が垣間見られるということなのである。マクタガートの取り上げた出来事の例は、す

べて時間軸上の出来事である。あたかも直線上に配置された出来事の継起的な連続性がそこでは観念されているのであって、そのような観念はそうした直線を俯瞰する視点を前提にするはずである。そうすると、そのような視点からすればすべての出来事が無時間的な数学的順序として与えられるはずであろう。このような視点はある意味時間を超越しているとも表現できよう。「無時間」としての「永遠性」の相の下での超越的視点を暗に含み持つが故に「時間は実在しない」という結論に至るのも必然である。B系列の時間を観念できるのも、暗にこうした視点を含みゆえとも言えないだろうか。しかし同時に、我々は先の三木や田辺が指摘した世界にコミットした行為の視点を併せ持つ。視点依存的な「現在」に定位して「過去」「未来」を位置づけるA系列の時間もそうした視点を含み持つ。その意味で、「歴史的時間」の固有性とは、A系列の時間、B系列の時間の二重性を同時に抱懐する主体において立ち現れてくる時間性なのではないかと思われる。

## 【注】

- 1 『三木清歴史哲学コレクション』（書肆心水）2012、p.96.
- 2 時系列的には三木清の歴史哲学に関する思考の方が、他の「京都学派」の面々による歴史哲学的営為より包括的かつ時代先行的であり、師である西田幾多郎や先達の田辺元よりも先んじていたとさえいえる。この点につき、小林敏明『〈主体〉のゆくえ——日本近代思想史への一視角』（講談社選書メチエ）2010. には、この三木清の歴史哲学的考察の先駆性が論証されている。時の流行に敏感であったディレクティブ的な側面もなきにしもあらずの三木ではあったが、京都帝国大学哲学科卒業時の主題も歴史哲学であったし、ドイツ留学時にも師事したリッケルトやハイデガーに対して、自らの関心テーマは歴史哲学である旨を説明している。同じくドイツ留学をしていた歴史家羽仁五郎の影響を受けてかマルクス主義にもコミットしていた。
- 3 若きケインズは、ケンブリッジ大学の学生時にマクタガートの講義に出席したことを契機に、時間の問題を「あらゆる形而上学的体系における最大の躓きの石の一つ」として捉え、時間尺度の相対性や時間と変化の概念の相互連関性について思考をめぐらしつつ、マクタガートの見解に対しては「時間のなかにある事物が非実在的である状態と比べて、無時間の状態において解決を見出すことができるのだろうか」と疑問を供している。この辺の事情については、ジル・ドスタレール『ケインズの闘い——哲学・政治・経済学・芸術』（藤原書店）2008が詳しい。
- 4 野家啓一『物語の哲学』（岩波現代文庫）2005. は、歴史を叙述するという場面に定位して、歴史の叙述は物語的言説のかたちをとらざるを得ない点を強調し、過去の出来事を想起という作用を通じて再構成されたものであるとする「歴史の反実在論」を提起する。なぜならば、歴史的出来事とその叙述は究極的には分離不可能なものであり、その叙述の在り方は一定の共同性のもとにおける語りを前提にせざるをえず、歴史の記憶は構造化された言語的制作者を回避できないから、そうした叙述から独立した歴史を前提にすることは不可能であるとの理由である。そこで描かれる時間は、直線上を一方に「流れて」いくといったものではなく、時間が「積み重なっていく」かのように表象される。所謂「サントリー・テーゼ」と言われるのは、「時は流れない。それは積み重なる」という、かつて放映されていた洋酒メーカーであるサントリーによる、ウイスキー「クレスト12年」のCMで使用されたコピーと同一であるからである。なお、こうした時間の「地層的」表象は、他にも〔熊野純彦（2012）〕の冒頭の時間表象にもみられる。
- 5 社会科学における「確実性の終焉」を踏まえた上で新たな知の再構築の必要性を主張する〔Wallerstein, I. (2004)〕は、既存の社会科学の多くが謂わば「ニュートン力学的」時間概念を踏襲しており、この点こそが社会科学の諸理論が陥っている桎梏の原因の一つであるとして、社会科学における時間の多様性、中でも「歴史的時間」という有意義な概念を積極的に取り出す必要を主張し、そのモデルとしてイリヤ・プリゴジンやフェルナン・ブローデルの提示した時間概念を評価する向きもある。フェルナン・ブローデルは、出来事が年代順に並んだ時間に対して「長期持続」を対置する。外在的かつ物理的なパラメータとしての時間に対して、ブローデルが主張するのは社会的時間の複数性であり、それは、「作り出される」あるいは「作り出された」時間である。〔Braudel, F. (1952)〕, pp.71-72. 参照。ブローデルの時間概念については〔貫成人（2010）〕が詳しい。
- 6 時間は、被造物が持つ条件の一つであるから、それもまた世界自身がもたらされた行為の中で創造されたのでなければならない。だから創造神は時間の変化の外側にいるのであって、「一回」の行為で「過去」「現在」「未来」（これはあくまで被造物である我々人間の視点からみた概念でしかない）を存在させたことになる。創造とは、突然物事が始まった大昔に起こった何らかの事件というだけのことでなく、今、この瞬間も万物の存在を支えている行為である。
- 7 歴史的にどの時間表象の型が主流であったのかについては、社会学の研究でもなされている。〔真木悠介（2003）〕がその詳細な分析である。また、哲学においても時間表象の歴史的変遷を、その元になるパラダイムの革新から分析・記述している〔廣松渉（2007）〕がある。
- 8 もっとも、だからといって双方向的運動から直ちに歴史的に見られた円環的時間表象が帰結するわけでもなく、そこには距離があることも確かである。ただし擬周期的な自然現象との重ね合わせからそのような表象がもたらされたのではないかという仮説を立てることは

許されるだろう。もちろんその論証は別の課題を構成することになる。

- 9 物理学的时间概念は、ガリレイの振子の法則や速度保存の法則そして落体の速度と時間の関係についての理論によって導入され、ニュートンによって厳正な形で整理された。さらに電磁気学的时间、相対論的时间へと進展した。中でも熱力学的・統計学的时间は、その巨視的現象面において、他の基礎的法則における時間概念とは異なり不可逆の性質を一見持つかに見える。エルゴード定理が正しければ、物理的系は時間が十分に経てばいくらかでも元の状態に復帰できる擬周期性を指し示してもいる。古典論（相対論も含む）では、物理量の値を決定する物理的操作も同時に決定可能であり、命題はある実在の物理量を正しく描写するという前提がある。例えば、ある物理量  $A$  は実数上のある領域  $\Delta$  にあるという形式を考えてみた場合、量  $A_1$  と  $A_2$  を組み合わせるとして、量  $A_1$  と  $A_2$  は各々  $\Delta_1$  及び  $\Delta_2$  にあるというようにである。
- 10 [田辺元 (2001)] p.17.
- 11 [田辺元 (2001)] p.17.
- 12 ニュートン力学の世界モデルは、一様等方空間、一様に流れる時間、無機質な質点系からなる。量子力学の世界モデルは、ニュートン力学の世界モデルにミンコフスキ時空を厳密な整合性を無視するかたちで接合したものであり、その不十分な世界モデルは、相対論との関係において時間の扱いについての決定的矛盾をもたらしている。場の量子論ともなると、粒子とは場の状態のことであるから、時間的に自己同一性を保てない。粒子の統計性は粒子を状態と考える事によってのみ理解可能であり、空間領域にしても相対論の観点からは時間的に異なる同じ場所というのは無意味と化す。
- 13 [Barbour, J. (2001)] は、もちろん自身の主張と同じ [McTaggart, J.E. (1927)] も参照しはするものの、自身の主張とは全く独立の関係にあることを注釈で触れている。
- 14 もちろん、日常的な時間感覚と特殊相対性理論からの帰結である時間描像との関係につき、両者に折り合いをつける見解もありうる。考え得る見解の一つは、時間の「流れ」が大局的とは反対の局所的な意味を持つと認める限りにおいて、特殊相対性理論と時間が「過ぎ行く」ことは両立すると解する見解である。もう一つの見解は、特殊相対性理論によれば、世界は固定された四次元時空の「ブロック」であるが、これは通常の経験に対する見方とは対立しないとする見解である。前者については、時間の「流れ」が何であれ、それは単なる幾何学的事実ではなく、局所的な存在だけではいられないという問題が、後者については、未来は現在のようにすでに到達されているという仮定に基づいて行動したときにもたらされる混乱という問題を抱える。なお、このマクタガートの思考と相対論の帰結との関係につき技術的にも込み入った考察を展開するのが [Earman, J. (2002)] である。ところで特殊相対性理論は、慣性基準系にのみに当てはまる限界を持つが、より包括的な一般相対性理論には、かかる制約はない。特殊相対性理論が物質はエネルギーと等価であるという発見を持ち込んだとすれば、一般相対性理論は重力と時空の曲率の同等性を主張する理論といえる。運動している物質はその周りの時空の曲率を決定する。そうするとゲーデルが当該論文で主張しているように、ある基準系が宇宙の物質の平均運動にしたがう「特権」をもっているかもしれないという可能性が生じる。この基準系に相対的な時間は「宇宙時間」と呼ばれる。結局のところ、この「宇宙時間」が前理論的な意味での時間が相対性理論、とりわけ一般相対性理論と整合しているかもしれないという可能性をひらくわけだが、この点については別稿での検討に委ねたい。
- 15 このゲーデルの見解に関しては、様々な異論が差し挟まれようが本稿の趣旨とは異なるので深入りはしない。[内井惣七 (2007)] がこの点について立ち入った考察を残している。
- 16 それゆえ「ゲーデル宇宙」の示す「タイムトラベル」の可能性は、時間の「非実在性」に結びつくというのがゲーデルの主張である。この主張を肯定的に捉えるのが [Horwich, P. (1987)] である。もちろん、ゲーデル宇宙が実際の宇宙であるというわけではなく、あくまで可能な宇宙の一つである。単なる可能な宇宙において時間がないことから、この世界の時間の非実在性を証明できることになるのだろうか、という当然おこるべき疑問が提起されよう。ゲーデル論文の特徴の際立つ点は、この推論を肯定する点にある。ゲーデルによれば、数学的对象が可能であるならばそれは必然であり、ひいては現実的であることを意味した。なぜならば、必然的に存在するものは、すべての可能な世界に存在するのでなければ全く存在できないからである。この可能性から現実への推論様式は、聖アンセルムスやライプニッツによる神の存在についての「存在論的証明」にも採用されている。この論法によれば、神は偶然の存在だと考える事はできず、存在するからにはあらゆる可能な世界に存在することが必然的であることになる。このことから、神が可能であるならば神は現実存在することが帰結する。これと並行させて、時間が消滅している「ゲーデル宇宙」の単なる可能性から現実世界における時間の非存在に議論を進めるなかで、ゲーデルは、この可能な世界は現実世界で得られるものと同じ物理法則によって支配されているので（我々の世界と異なるのは物質と運動の大局的な分布だけである）、時間がその可能な世界は存在できない一方で、我々の世界には存在しないということはある。これを否定するためには「時間の客観的経過があるかないか、つまりは普通の意味で時間が存在するかしないかは、この世界に物とその運動が配列されている、その配列のされ方次第だ」と主張しなければならぬと推論した。「ゲーデル宇宙」には時間は存在できないことを証明する。したがって時間は我々自身の宇宙では存在しえない。ここに時間は完全に消去される。このような論筋である。
- 17 [三木清 (1932)] p.114.
- 18 [三木清 (1932)] p.114.



19 [三木清 (1932)] p.115.

20 この「つくる」この重視が、マクタガートのA系列の時間の解釈として妥当であるかという解釈論上の問題はなお残ることは確かである。しかし、ここで述べたいことはマクタガート解釈として「つくる」という作用の重視があったか否かということではなく（あったかなかったかという点だけとれば、マクタガートには行為に定位した論述はない）、三木や田辺に見られる行為の「つくる」という作用の重視が暗に前提している時間論的な立場が、A系列の時間を当然の前提にしているということなのである。それゆえ、本稿とは別に、個別の問題として京都学派の行為の哲学にみられる時間論的前提を主題化して論じなければならない。

21 筆者は、その形而上学的立場として「時間の非実在性」のみならず「空間の非実在性」を主張する見解に与する。したがって、少なくとも「時間の非実在性」について各々個別のアプローチによってこれを立証せんとしたマクタガートやゲーデルならびにパーマーといった哲学者や数学者および物理学者の主張については、一部の留保がともなうものの、その基本的な部分については賛同する立場である。だからといって、かかる形而上学的問題に対する見解が「歴史的時間」の固有性を認める見解と矛盾するとは思われない。というのも、「歴史的時間」の固有性の問題は、専ら形而上学的な問題ではなく、具体的な世界における実践の場面における対世界、対人間との関係から構成される認識論的問題であると位置づけるからである。

## 【参考文献】

(外国語文献)

Barbour,J. (2001) : *The End of Time: The Next Revolution in Physics*.Oxford University Press.

Braudel,F. (1952) : “Histoire et Sociologie” in *Ecrits sur l'histoire*,pp.71-72.

Earman,J. (2002) : “Thoroughly Modern McTaggart or What McTaggart Would Have Said If He Had Read the General Theory of Relativity ”<http://www.philosophers'imprint.org/002003/>

Gödel,K. (1949a) : “Some Observations about the Relationship between Theory of Relativity and Kantian Philosophy”, in *Kurt Gödel Collected Works 3*, (1995), pp.247-259.

Gödel,K. (1949b) : “An Example of a New Type of Cosmological Solutions of Einstein's Field Equations of Gravitation” in *Kurt Gödel Collected Works 2*, (1990) pp.190-198.

Gödel,K. (1949c) : “A Remark about the Relationship between Relativity Theory and Idealistic Philosophy” in *Kurt Gödel Collected Works 2*, (1990) pp.202-207.

Gödel,K. (1952) : “Rotating Universes in General Relativity Theory” in *Kurt Gödel Collected Works 2*, (1990), pp.208-216.

Horwich,P. (1987) : *Asymmetries in Time:Problems in the Philosophy of Science*.MIT Press.

McTaggart,J.E. (1927) : “The Unreality of Time”*Mind*17,pp.457-473 .reprinted by *The Nature of Existence*, vol.2.Cambridge University Press,pp.9-31.

Wallerstein,I. (2004) : *The Uncertainty of Knowledge*, Temple University Press.

(邦語文献)

内井惣七 (2007) : 「ゲーデルの宇宙」(『現代思想 (35-3)』) pp.186-195.

神川正彦 (1970) : 『歴史における言葉と論理——歴史哲学基礎論 I、II』(勁草書房)

熊野純彦 (2012) : 「反復と模倣——源氏物語・回帰する言葉の悲劇に寄せて」(『季刊日本思想史 (80)』) pp.128-152.)

小林敏明 (2010) : 『<主体>のゆくえ——日本近代思想史への一視角』(講談社選書メチエ)

田辺元 (2001) : 『歴史的現実』(こぶし書房)

貫成人 (2010) : 『歴史の哲学』(勁草書房)

野家啓一 (2005) : 『物語の哲学』(岩波現代文庫)

廣松渉 (2007) : 「時間論のためのメモランダ」(『事的世界観への前哨——物象化論の認識論的=存在論的位相』(ちくま学芸文庫)

藤本忠 (2017) : 『時間の思想史——双対性としてのフィジカ・メタフィジカ』(晃洋書房)

真木悠介 (2003) : 『時間の比較社会学』(岩波現代文庫)

三木清 (1932) : 「歴史哲学」(『三木清歴史哲学コレクション』書肆心水、2012再録)

## On the Property of Historical Time

TSUBAI Shinya

Abstract:

The concept of time has been discussed since the earliest records of philosophy. It is rooted in the subjective experience of the passing present which appears to flow through time and thereby to separate the past from the future. Besides, there seems to be a general agreement that History is closely related to Time. It is not clear, however, what distinguishes the concept of so called 'History' from that of 'Time'. This paper demonstrates the property of 'historical time' that lays the basis for the concept of history. For the purpose of this elucidation, this paper studies McTaggart's thought on "Unreality of Time", and uses his thought in a different way by referring to the philosophical thoughts on history of Kiyoshi Miki and Hajime Tanabe, who were representatives of Kyoto School. I argue that 'historical time' stems from the epistemological duality of A-series and B-series.

Keywords: history, time, A-series, B-series

## 歴史的時間の固有性について

椿 井 真 也

要旨：

時間の概念は、哲学史の初めから盛んに論じられて来ているが、それは時間が流れるように現象し、それゆえ過去と未来とを区別できるかに見える主観的な経験に由来している。また、歴史とはこの時間に密接に関係すると考えられてきたにもかかわらず、歴史の概念と時間の概念との違いが何かはほとんど明らかになってない。そこで本稿では、この歴史の概念の基礎となっている「歴史的時間」の固有性を探り当てることを目的とする。この問題を解明するために我々は、哲学的時間論で有名な「時間の非実在性」を主張するマクタガートの思考を取り上げ、彼の主張する A 系列の時間と B 系列の時間との関係を、京都学派を代表する三木清や田辺元による歴史哲学に関する思考を参照することによって、別の仕方で読み替え利用する。そのことから本稿は、A 系列と B 系列の時間という二重性という認識論的な視差こそが「歴史的時間」を成り立たしめていることを論定する。